

豊山学報・第六六号
弘法大師御生誕千二百五十年
記念特別号 抜刷
令和五年三月発行
真言宗豊山派総合研究院

空海における「鏡」

小
渕
尊
史

空海における「鏡」

小 淵 尊 史

はじめに

「鏡」⁽¹⁾は、装身具や光学機械類のパーツとしてわれわれの生活に不可欠の器具である。その歴史は古く、紀元前六〇〇〇年頃のアナトリア高原（トルコ）遺跡から黒曜石の鏡⁽³⁾が出土している。その後、紀元前三一〇〇年頃の古代エジプトで銅鏡が使用され始め、古代中国では青銅製鏡が⁽⁴⁾発達した。⁽⁵⁾

本稿では、主に古代中国および和朝で使用された古代鏡について、文化史的な立場から、「鏡」の具有する霊的器物・宗教象徴性の諸々の意味合いを整理し、それらが空海のテクストに反映している有様と、特に仏教的伝統に則って「鏡」⁽⁶⁾仏智⁽⁷⁾ととりへの回路」の象徴性が強調される実態を述べることにする。

一 「かがみ」の有する様々な機能と象徴について

かがみは「鑑」「鏡」と漢字表記される。この二字は同一の器物を指すが、⁽⁶⁾厳密に言えば元来は「鑑」字の

方が先に用いられた。

「鑑」は大きな盥たらひのような銅器の呼称で、これに水を張れば姿かたちを映す「水かがみ」の役割を果たし、器の名称が換喩的に物事を映す「かがみ」として通用したと推測される。中国古典の経書（儒教の聖典）では、もつばら「鑑」字が用いられ、これは「かんがみる」という自己を反省的に対象化する意味の動詞でも使われる。⁽⁸⁾

一方、「鏡」は光り輝く金属（銅鏡）を意味し、戦国時代の『莊子』の頃から出現し、漢代では「鏡」字が主として使われるようになった。前漢武帝代（在：前一四一〜前八七）の『淮南子』では「鑑」「鏡」は一応区別されるが、金属製の研磨鏡が常用されて、後に両字は同一視されるに至る。⁽⁹⁾

このように起源を異にする「鑑」「鏡」は、儒家系統の歴史・政治的言説での天監・龜鑑・權威の意味合いと、道家系統での神秘的な呪術力という文脈での用いられ方が緬ない交ぜになって、三国六朝時代以降の典籍で、複雑で多層的な機能性を含み持った象徴語として宗教テクストでも頻りに用いられてきたのである。

本節では、「鑑」「鏡」の多様な利用のされ方とその意味合いを整理して紹介する（以後、煩雑を避けるために「鏡」字で記述をする）。

第一に鏡の基本的な特性が、

A 水面や金属・ガラスなどが、物体、特に人間の姿かたちを映し出す機能にあることは異論の余地がない。ここから、特に顔の影像を反映して容色を確かめ、装いを整えるための、

B 装身具・化粧道具という極めて一般的な用途⁽¹²⁾

が生まれる。このような日常的な利用法の対極に、

C 祭祀に用いられる呪具としての銅鏡の使用

も予測される。その際には、影像反映ではなく、太陽⁽¹³⁾の光を鏡に反射させて人々に畏敬の念を抱かせる効果⁽¹⁴⁾が重んじられた。

鏡の光り輝く反射は、一般的な円・太陽の形状と結びついて、

D 神秘性を具す太陽神の象徴⁽¹⁵⁾

として鏡が崇められる要因となった。神的存在を表わす鏡⁽¹⁷⁾は、その、

E 靈威を体现した人格Ⅱ王者の権威の象徴

の性格も具す。この権威者は中国では天帝および天子であるところの皇帝⁽¹⁸⁾、日本では天皇に相当する。中華皇帝は宝剑・玉璽と共に神威の鏡(天鏡・金鏡・玉鏡⁽¹⁹⁾)を天命承継の印として常時携帯していたとされる。本朝での天皇位の象徴「三種の神器」(八咫鏡・草薙剣・八咫瓊勾玉⁽²¹⁾)もまた、宝剑と神鏡を含んで、天皇の神聖性⁽²²⁾を保する。

次に過去の歴史的事実を倫理生活の教訓とするという意味での、

F 歴史を鏡とする態度⁽²³⁾

が古来、史書の題額に認められる(司馬光の『資治通鑑』、和朝の『大鏡』等⁽²⁴⁾)。これに類して、様々な分野での随順すべき、

G 手本・規範としての鏡(龜鑑・手鑑)

が概念として広く流通している。

さて、鏡を深淵なる真実相に擬える思考法も、戦国期の『莊子』と共に立ち現れた⁽²⁵⁾。老荘的「道」を体得した絶対者である「至人⁽²⁶⁾」について、「至人の心を用うるは鏡のごとし⁽²⁷⁾」と理想的な心の状態を鏡の比喩で表明している。「水静なるも猶お明らかなり。而る^{しか}を況や精神なる聖人の心の静なるをや。天地の鑑なり、万物の鏡なり⁽²⁸⁾」とも記され、道家的な聖人Ⅱ帝王の境地が明鏡で示される。また「人は流水を鑑とすること莫くして、

止水を鑑とす」⁽²⁹⁾「鑑明らかなれば則ち塵垢止まらず、止まれば則ち明らかならざるなり」⁽³⁰⁾といった記述から、

H 心のあるべき状態Ⅱ明鏡止水

という高度な悟達者の境地が『莊子』で設定されたことが理解できる。明鏡止水なる心は、後年、道家・仏家の二教で齊しく⁽³²⁾追及される修道の目標となった。

この老莊の道家思想に、後漢末頃から⁽³¹⁾識緯思想・易学・神仙趣味などが結びつき、⁽³³⁾「鏡そのものを神聖視し、もしくはその機能を神秘化し神靈視する」⁽³⁴⁾潮流が伸長した。そこで鏡が担わされるのは様々な靈験を発現する、

I 靈鏡・隠れたものの正体を暴く真実照明の鏡⁽³⁶⁾

という属性である。晋代の葛洪著⁽³⁵⁾（二八三—三四三）著の『抱朴子』⁽³⁷⁾は神仙術関連の言説を集めて多大な影響を後世に及ぼすが、その登渉篇には山中に出没する化け物の正体（鹿・犬等）を鏡で暴き出すという挿話を収録する。初唐の王度⁽³⁸⁾（五八二頃—六二五頃）の伝奇小説『古鏡記』に、千年狸が鏡で本性を露見するという話があり、鏡の正体暴露という趣意の説話が広く流行していたと容易に推測できる。

六朝時代成立『西京雜記』中の、人間の内臓を映し出し善惡を判別する靈鏡譚⁽³⁹⁾については次節で述べる。

もののけの正体を見破る靈力は、邪惡な存在から身を守る、

J 破邪・魔除けとしての鏡

という重要な機能に連結される。『抱朴子』では、道士が神仙術を修するために入山する際の必須の呪具（魔除け）として鏡が提示される。直径九寸以上の明鏡を背中に懸ければ、山に棲む惡鬼邪魅が修行者に近づき誘惑することを防ぐ⁽⁴⁰⁾とする。山林修行の際に魔除けの鏡を持参する習いは、道術士のみならず仏教者にも伝えられる。天台智顗『摩訶止観』には、「隱士頭陀人多畜方鏡挂之座後。媚不能變鏡中色像」⁽⁴¹⁾「行人の修禪座の後ろ側に四角い鏡を懸けていれば、妖魔が鏡の中でその姿を変化させることができない」と述べられ、仏教の山林遊

行者にも破邪鏡が愛用された形跡を見出せる。⁽⁴²⁾

禍を為す邪魔を退ける霊力は、修行者のみならず、一般の人々にも鏡の効用として重用された。埋葬の副葬品として頻繁に観察される鏡は、土中に葬られた死者のために地下世界を照らし、悪霊から死者を護る、⁽⁴³⁾

K 護衛・辟邪及び鎮魂の機能⁽⁴⁴⁾

を備えた鏡の性格を物語る。鏡の神秘的な魔力という点では、

L 未来を予知する占鏡⁽⁴⁵⁾

という属性や、

M 所有者に長寿・幸福・地位を与える招福鏡⁽⁴⁶⁾

の現世利益の効能を謳った事例が確認できる。なお、俗世間での夫婦和合の象徴・恋愛感情の形代としての鏡⁽⁴⁷⁾については、本稿では割愛する。

こうした霊器＝鏡の多様な機能は、鏡背に彫られた西王母・黄帝・仙人の形象(神人龍虎画像鏡⁽⁴⁸⁾)や青龍・朱雀・白虎・玄武の四神像(方格規矩四神鏡⁽⁴⁹⁾)等に見られるように、道家的・神仙的要素が色濃く反映されるもので、これは中国特有の宇宙観とも呼べる。

一方、視点を転じれば、奥玄なる「道＝真理を象徴する鏡」に類似した認識様式を、外来の仏教思想に観察することができる。仏教の定説として、

N 悟りの智慧・仏智としての鏡⁽⁵⁰⁾

の教説は、仏典の各処に見出される。

＊東晋・瞿曇僧伽提婆譯『中阿含經』に「云何比丘聖智慧鏡」⁽⁵¹⁾

＊失訳『仏説出家功德經』に「於此清淨智慧鏡中。爲於解脫諸善法故」⁽⁵²⁾

* 羅什訳『妙法蓮華經』に「若持法花者 其身甚清淨 如彼淨琉璃 衆生皆慧見 又如淨明鏡 悉見諸色像」⁽⁵⁶⁾

* 般若訳『四十華嚴經』に「菩提心者猶如明鏡。普現一切法門像故」⁽⁵⁷⁾

* 真諦訳『大乘起信論』に「現衆生心者猶如於鏡」⁽⁵⁸⁾「有四種大義。與虚空等猶如淨鏡。云何爲四。一者如實空鏡」……「二者因熏習鏡」……「三者法出離鏡」……「四者緣熏習鏡」⁽⁵⁹⁾

* 『無畏三藏禪要』に「五者明鏡心。既離散亂之心。鑒達圓明一切無著。故云明鏡」⁽⁶⁰⁾

等はその典型例である。「鏡」の智慧の象徴という思考法の延長線上に、仏の至上円成なる徳智を転識して得られる、

○ 大円鏡智・五智の概念

が導き出される。玄奘訳『仏說仏地經』の「如圓鏡極善磨瑩。鑒淨無垢光明遍照。如是如來大圓鏡智。於佛智上。一切煩惱所知障垢永出離故。極善磨瑩爲依止定。所攝持故鑒淨無垢。作諸衆生利樂事故。光明遍照」⁽⁶¹⁾に、一切を普く照らして衆生を救済する如來の徳を「大円鏡」と定義すると説かれる。大円鏡智を頂点とする如來四智が、密教的な五智思想の源であることは言を俟たない。

仏智を鏡で比喻する教理とは別箇に、仏教儀礼に鏡が用いられる事例がある。真言密教で、

P 行者に授与する灌頂具としての鏡

という、灌頂次第の一端に觀察できる。これに關しては、

* 『大日經』に「持眞言行者 復當執明鏡」⁽⁶²⁾

* 『大日經疏』に「上來所說漫荼羅方軌法用散華灌頂。乃至或授以明鏡。如以金鉀決其眼映」⁽⁶³⁾

* 『略出念誦經』に「復執鏡。令其觀照。爲說諸法性相。說此偈言」……「汝今眞佛子 應廣利衆生」⁽⁶⁴⁾

等と説かれる文に、授灌の際の鏡の授与・把持の動作が見出される。

儀礼と一部関連して、密教修法の観想に於いて、

Q 悟りの場・悟りへの回路

という性格が鏡に付与される。これは明鏡・円鏡・月鏡を仏の智慧に渉入する媒介として活用するものである。具体的には、

* 『大日経』悉地出現品の「於鏡漫荼羅 大蓮華王座 深邃住三昧 總持髮髻冠 圍繞無量光」⁽⁶⁵⁾

* 『大毘盧遮那經広大儀軌』の阿字観を説く

「鏡中觀阿字 放淨妙光明 普現圓光内 千界爲増數 流出光焰輪」⁽⁶⁶⁾ (鏡の中に阿字を觀じてそれが光明を流出する様を仏智顯現とする)

や、

「於鏡曼荼羅 作本尊三昧 觀心自圓明 微妙如圓鏡」⁽⁶⁷⁾ (光り輝く円鏡の如き円かなる曼荼羅を自心に觀じて本尊との瑜伽觀智を實踐する)

等の記述に確認される。

鏡は儀礼・修道に用いられる他、日本では、

R 仏教寺院の鎮壇具・内陣の莊嚴具

の役割も果たす。法隆寺・大安寺・薬師寺・興福寺・東大寺などの大寺の塔や堂宇の心礎・基壇には、鏡が安置され、⁽⁶⁸⁾ また本尊の周圍に多数の鏡が莊嚴された。⁽⁶⁹⁾ 鏡を尊崇する奈良時代の宗教的意識がここに反映されていると言える。

平安中期以降に成立した信仰形態である経塚への埋経供養では、経筒と共に鏡が副葬されたが、これは鏡の持つ「J 破邪」と「R 鎮壇」の二つの機能が併せて期待されたものと思われる⁽⁷¹⁾。

日本に固有の鏡信仰という特徴は、神社に関する様々なアイテムに見出される。具体的には、

S 神社の神体や御霊代として本殿に安置される鏡⁽⁷²⁾

T 神宝あるいは幣帛として神に捧げられる鏡⁽⁷³⁾

が挙げられ、神社と鏡は不離の間柄にあると言っても過言ではない。また、キリスト教文化圏に於いては、鏡が神の神聖性のシンボルとして認識されている⁽⁷⁵⁾。

最後に、事物を反映させる器物という基本的な性質とは違う鏡の用途を述べる。それは「鑑」の金属の物性を利用して火や水を獲得するという、

U 採火・取水の不思議な器

である。前者は太陽光を凹面鏡で反射させ焦点を結ばせて発火させる原理に基づいたもので「陽燧⁽⁷⁶⁾」と呼ばれる⁽⁷⁷⁾。月から水を採取する「実際には飽和量を超えた空気中の水蒸気が冷えた金属の表面で結露する現象」銅鏡は「陰燧⁽⁷⁸⁾」「方諸⁽⁷⁹⁾」と呼ばれる。『抱朴子』金丹篇には「以作方諸、以承取月中水、以水銀覆之、致日精火其中、長服之不死」「方諸で採取した月の水を、陽燧を用いて太陽から得た火で加熱すると、不死の霊薬ができる」と記され⁽⁷⁹⁾、これらの水火の鏡が特別な霊力を備えた驚異の器具であったことを示している⁽⁸⁰⁾。

以上、古代の和漢で鏡が有した機能を二カテゴリーに分類した。次節以降で、空海のテクストに見出される鏡の表現が、これらの範疇のいずれに属するかを検討してゆく。

二 空海の重用する鏡の比喩…「秦鏡」

空海がその著作で用いる鏡の語彙の中で最も印象的なのが、人間の五臓をレントゲンのように映し出し、心の正邪を暴露する不思議な「秦鏡」である。『弁頭密二教論』には優れた教え密教を未だ知らざる頭教学匠に対して、

1 若有善男子善女人一嗅斯芸。秦鏡照心權實水解。⁽⁸¹⁾ (若し善男善女有つて一たび斯の芸^{かぎ}「密教の教え」を覲^かば、秦鏡^{とけい}心を照らし、權實「密密」水解けなん。)

と語りかける。真言密教がその類まれな靈威によつて衆生の心の真相を照らし出し、仮の教え(頭教)に執着する邪念を水解させるという文脈である。秦鏡の故事は夙に済暹が『辨顯密二教論懸鏡抄』で指摘したように、前漢代の西京(長安)の雜事を記録した体の逸話集『西京雜記』⁽⁸³⁾卷三に依拠する。

○高祖「劉邦」初入咸陽宮、周行庫府。金玉珍寶不可稱言「中略」有方鏡、廣四尺、高五尺九寸、表裏有明。人直來、照之、影則倒見。以手掩心而來、則見腸胃五臟、歷然無礙。人有疾病在內、掩心而照之、則知病之所在。又女子有邪心、則膽張心動。秦始皇常以照宮人、膽張心動者、殺之。⁽⁸⁴⁾

「通釈」秦朝滅亡の際、始皇帝の宮殿咸陽宮に漢の高祖劉邦が踏み入り、宝物庫の財宝を検めた。そこに幅四尺(九〇cm)、高さ五尺九寸(一三三cm)の表裏ともに光り輝く大型の方鏡(四角形の鏡)があった。鏡に向かつて人が対すると、逆さまの鏡像が結ばれ、胸に手を当てると極めて鮮明に胃腸や五臓が映し出された。体内に疾病を患う人が対面すると、どこに病があるか如実に示した。また、心に邪な思いを持つ女性は、その肝が膨らんで心臓が激しく鼓動する様が映った。始皇帝は宮中の女官をこの方鏡に對峙させ、肝と心臓に邪惡の相を示す惡心の女を殺害するのを常とした。⁽⁸⁵⁾

普通は外側から窺い知れない人間の内側・心の真相を、如実に影像化するという霊鏡は、前節のカテゴリー「I 隠れたものの正体を暴く真実照明の鏡」の最適例である。秦宮の方鏡は後に「照胆鏡」⁽⁸⁶⁾「照骨鏡」⁽⁸⁷⁾と呼ばれ、出典の『西京雜記』が梁代以降幅広く読まれたのに対応して人口に膾炙した。また「秦鏡高懸」は成語化し、特に心に邪念を抱かない官吏の清正廉潔・公正廉明を表現する。

空海は「秦鏡」の語を以て、容易には窺知できない奥深い秘密真実の教え（真言密教）の価値を顕然たらしめる機能を言い表し、ひいては真言法門そのものを象徴する比喩として用いたのである。空海はこの秦鏡の比喩を複数のテキストで繰り返し採用し、愛着する様を見せる。

2 子未見大道妄吐斯言。今當攬秦鏡臨子面。⁽⁸⁹⁾（子、未だ大道を見ずして、妄に斯の言を吐く。今當に秦鏡を攬つて子が面に臨むべし。）——『秘藏宝鑑』卷中・十四問答

これは、憂国公子の主張「天災疫癘及び天下不寧動乱といった国家的な災禍は、非法濫行の墮落した仏教僧のせいである」に対する、玄関法師の反論部分である。公子の見解は物事の真理（大道）を心得ない妄言であると断じた上で、法師は事の真相を如実に観察せよと諭す。その手段として、「真実照明の鏡」秦鏡を手に取り、己が面貌を映して心内の邪悪・誤謬を認知せよと勧告するのである。

「秦鏡」は空海若年の作『三教指帰』で既に用いられていた。

3 宜鑒秦王顯偽之鏡。早改葉公懼真之迷。⁽⁹⁰⁾（宜しく秦王の顯偽の鏡を鑒み、早く葉公が真を懼るの迷を改めよ。）

——『三教指帰』

同趣意の対句が、空海の詩作品に見出される。

4 葉公玆假借 秦鏡照真相⁽⁹²⁾⁽⁹³⁾（葉公假借を玆とし 秦鏡真相を照らす）——「遊山慕仙詩」

これらは「葉公好龍」⁽⁹⁴⁾の故事を基にした句で、「懼真之迷」は葉公が本物の龍を見て恐怖の余り逃げ出したこ

とを指す。従つて葉公の龍好きを、本物ではなく偽物を愛好した似非通人^{えせ}ぶりと嘲り、彼の隠された真実(「真相」)を暴く手段が秦鏡であるとする内容である。また別の詩には、

5 長者樓中圓鏡影 秦王臺上方丈相⁽⁹⁵⁾ (長者⁽⁹⁶⁾の樓^{ろう}の中^{うち}の圓鏡の影 秦王^{うてな}の臺^{たい}の上^{うへ}の方丈^{ほうちやう}「〓四角形」の相「〓姿かたち」) — 「詠十喻詩」の四「詠鏡中像喻」『性靈集』卷十

とも表現される。

これらの文例から、秦宮の方丈の靈鏡を、隠蔽秘匿された真実相を暴露する真理開頭の最勝法具として、空海が偏愛した様が見て取れよう。

ちなみに、秦鏡の語彙については、嵯峨天皇も御製「和內史貞主秋月歌」詩に「[月]形如秦鏡出山頭 色似楚練疑天曉(形は秦鏡の如く山頭^{やまのへ}を出で 色は楚練^{それん}に似て天の曉^{あけ}るかと疑ふ)」と詠み込んでおり、嵯峨朝詩壇でこれが詩語として認知されていた事態を窺わせしめる。

三 空海のテキストにおける「鏡」の諸相…①全般

本節では、空海の著作で用いられる鏡の表現が、第一節で分類したどの範疇に属するかを整理する。

★A 水鏡・万物を映す澄水

鏡の基本的な機能、姿かたちを映し出すことに関して、特に水に映り込んだ映像あるいは水面・湖面を鏡と見立てる表現、及び水鏡を心の状態として描くことはある意味定型的な詩語であるが、こうした明瞭な比喻は空海のテキストの各処に散見される。

6 水鏡冰霜之行盡滅⁽⁹⁹⁾ (水鏡冰霜^{みづきやうひやう}の行^{ぎやう}盡^{ことごと}くに滅^きえ) — 『三教指帰』

明鏡止水の如き心の状態を「水鏡」、清廉潔白を「冰霜」と言い表して、蛭牙公子の暴戾無惨の振る舞いを諷める文相である。

7 池鏡泓澄含日暉⁽¹⁰⁰⁾（池鏡泓澄^{わいたい}「水清澄」⁽¹⁰⁰⁾として日暉^{にっけい}「日光」を含めり）——「秋日觀神泉苑」

8 池鏡無私。万色誰逃。山水相映⁽¹⁰¹⁾。（池鏡私無^{わたくし}。万色誰か逃れむ「全てが映し出される」。山水相映^{あひかがや}く。）——「沙門勝道歷山瑩玄珠碑并序」

9 其南湖則碧水澄鏡深不可測⁽¹⁰²⁾。（其の南湖には則ち碧水澄めること鏡のごとくして、深さ測る可からず。）——「沙門勝道歷山瑩玄珠碑并序」

ここでは、湖水・池面そのものが澄明なる鏡と表現されている。また、次の二例は池水・流水が鏡に喩えられる。

10 深而且廣 鏡徹紺色⁽¹⁰³⁾（池水）深くして且廣^{また}し 鏡のごとく徹^{とほ}つて紺の色なり）——「大和州益田池碑銘并序」

11 涌泉水鏡而表裏。流水汎溢而左右⁽¹⁰⁴⁾。（涌泉水鏡のごとくして表裏なり。流水汎溢^{はんいつ}して左右なり。）——「綜藝種智院式并序」

また鏡を類推させる文例に、澄淨の水という鏡の如き自性清淨円明体に、海印森羅の影像が映し出されるとする

12 悟心原故一大之水澄淨。澄淨之水影落萬象⁽¹⁰⁵⁾。（心原「一心の本源」を悟るが故に、一大の水澄淨なり。澄淨の水、萬象を影落す。）——『秘藏宝鑰』第九住心

が挙げられる。

★A' 鏡を磨いて物を映す

全ての金属・鏡が如実に事物を顕然させるわけではなく、そこには明淨なる状態に鏡を磨き上げるといふ条

件が付帯する。清らかに磨き上げて鏡面が清浄明晰であれば、そこに様々な影像が映現するという文意(当然修行の觀念を含意させる)の事例は、

13 臺鏡瑩磨俯應機水者也(臺鏡瑩磨いで機水に俯應する者なり)「勝道上人」——「沙門勝道歷山瑩玄珠碑并序」

14 味金照面。必待瑩拂。(味金「出土した真金」の面を照らすことは、必ず瑩拂を待つ。)——「爲藤真川舉浄豊啓」

15 欲知面妍媸。不如磨鏡。(面の妍媸「美醜」を知らむと欲はば、鏡を磨かんには如かじ。)——「答叡山澄法師求理趣釋經書」

16 明鏡瑩淨妍蚩之像現之。清水澄湛大小之相影之。(明鏡瑩淨めつれば妍蚩の像「美醜の影像」之を現じ、清水

澄み湛ふれば大小の相之に影る。)

17 澄鏡則天佑響應。(澄鏡なるときは則ち天佑「仏の加護」響のごとくに應ず。)——「爲式部笠承願文」

等を指摘できる。これらの明鏡照映の概念は大乘教理に通底するもので、『弁頭密二教論』に引用される『大智度論』の、

18 法身常放光明常說法。衆生有無量劫罪垢厚重不見不聞。如明鏡淨水照面則見垢翳不淨則無所見。(法

身は常に光明を放つて常に說法したまへども、衆生は無量劫の罪垢厚重なること有つて、見ず聞かざること、明鏡淨水の面を照らすときは則ち見、垢翳不淨なるときは則ち所見無きが如し。)

という一節にも確認できる。

★B 化粧道具

装身具としての鏡を、女性の逝去に關して故人を偲ぶ意味合いで用いる事例が、次の二例、

19 誰期秋葉易落夜燈忽暗。面花不寫鵲鏡悲。(誰か期せん、秋の葉落ち易く、夜の燈忽ちに暗からんとは。面花寫

らずして鵲の鏡悲しむ。)

——「藤左近將監爲先妣設三七齋願文」

20 紗窓朝鏡忽失照覽之影。⁽¹¹⁵⁾（紗窓の朝の鏡忽に照覽の影を失ふ。）——「三島大夫爲亡息女書寫供養法華經講說表白文」に見出される。

「C 祭祀に用いられる呪具」「D 太陽神の象徴」という鏡の用法は空海の著作には認められない。

★E 王者の権威の象徴

皇帝の威風・善政を讃美することに繋がる神威の鏡の事例は以下の通り。

21 能行此五則四序玉燭五才金鏡。⁽¹¹⁶⁾（能く此の五「五常」仁義禮智信を行すれば則ち四序玉燭「四季調和」し、五才「五行」金鏡なり。）——『秘蔵宝鑰』第二住心

22 玉燭調和。金鏡照耀。⁽¹¹⁷⁾（玉燭調和し、金鏡照耀す。）——「獻梵字并雜文表」

金鏡が王道の明正なることを比喩する。木・火・土・金・水の五行がその定位を遵守し、四季が順和で寒暑時宜を得て天体の運行に不調が無い等の安定した状態を保つことを、明了で一点の曇りもない金鏡と言い表すのである。

23 不空叨承聖澤冀玉鏡之重開。⁽¹¹⁸⁾（不空叨に聖澤を承けて、玉鏡の重ねて開かんことを冀ふ。）——『秘密曼荼羅教付法伝』

聖澤は唐の皇帝からの恩沢、これを受けて仏法が再興をすることを「玉鏡之重開」と表現するから、玉鏡は実質的に皇帝の徳の讃嘆表現。ただしこれは不空の文の引用である。空海の編著『文鏡秘府論』巻北に皇帝讚美の語彙表現を集めた「帝徳録」が収録されるが、そこに、

24 懸明鏡以高臨。⁽¹¹⁹⁾（明鏡を懸けて以て高く臨む。）

という徳政のスローガンが見出される。

★G 手本・規範としての鏡

一般的な手本という意味合いでの「鑑」「鏡」の文例は、

25 此是密藏人未多解。是故戈釣經論今為一手鏡。⁽¹²⁰⁾ (此は是れ密藏なり。人未だ多く解らず。是の故に経論を弋釣して合して一の手鏡「指南の書」と為せり。——『弁頭密二教論』)

26 如來明說其差別。是故攬此龜鏡可簡得。⁽¹²¹⁾ (如來明らかに其の差別「諸乘優劣」を説きたまふ。是の故に此の龜鏡を攬て簡得す可し。——『三昧耶戒序』)

27 夏殷傾滅。周漢興隆。並之前覆之龜鏡。後誠之美風。⁽¹²²⁾ (夏殷の傾き滅び、周漢の興り隆んなるは、並びに之れ前覆の龜鏡、後誠の美風なり。——『三教指帰』)

28 配卷軸於六合、懸不朽於兩曜、名曰文鏡秘府論。⁽¹²³⁾ (卷軸を六合に配し、不朽を兩曜に懸け、名づけて『文鏡秘府論』と曰ふ。——『文鏡秘府論』)

29 今更抄其要含口上者爲一軸握鏡可謂文之眼筆之心。⁽¹²⁴⁾ (今更に其「『文鏡秘府論』」の要の、口上に含む者を抄して一軸の握鏡と爲す。文の眼、筆の心と謂ふ可し。——『文筆眼心抄』)

が挙げられる。これらに關しては特にコメントを付す必要はないであろう。文例26は「F 歴史書」の意味合いをも含み持つ。

「H 心のあるべき状態としての鏡」は次節以降の事例検討に包含させる。また、

★I 隠れたものの正体を暴く真実の鏡

について、前節でその典型を紹介したが、人間の真実相を鏡面に映し出す秦鏡の在り方とは正反対に、鏡に映った像は「真」「実像」ではなく偽りであると喝破する文例が空海のテキストに散見される。

30 團團水鏡空而假。灼灼空花亦不真。⁽¹²⁷⁾ (團團たる水鏡は空にして假なり。灼灼たる空花は亦た真にあらず)——「故

贈僧正勤操大德影之讚并序」

31 桂影團團寥廓飛。千河万器各分暉。法身寂寂大空住。諸趣衆生互入歸。水中圓鏡是偽物。身上吾我亦

復非。⁽¹²⁸⁾「桂影」月「團團として寥廓」⁽¹²⁹⁾「虚空」に飛ぶ 千河万器 各暉を分かつ 法身寂寂として大空に住す 諸趣の衆

生互に入歸す 水中の圓鏡は是れ偽れる物 身の上の吾我も亦復非なり —— 「詠水月喻」

この詩では、虚空・大空に浮かぶ月を法身とし、月影が差して地上のあらゆる河川・池水や大小の器に月の映像を分かち宿す状況を設定する。当然「仏月」という真実在は地上とは隔絶した「空」の領域にあるので、水鏡の中の月は法身の分身の徳を具すものの、「真」ではなく「偽り」の影像であり、それを眺める主体「吾我」の身体と自我は実体のないものと論ず。これは、例えば般若經典の「解了諸法如幻如焰如水中月如虚空如響如鍵闥婆城如夢如影如鏡中像如化」や「虚妄不實空無所有不自在相。譬如陽焰光影水月鏡中像等」⁽¹³⁰⁾という經文を典拠とする空思想の系譜に連なる認識態度である。真理を如実に顯現する呪力と、鏡中の映像は偽りの虚像に過ぎないとする空觀の、両立し得ない要素が空海の著作に流入していることを予め了解しておくべきであろう。

鏡像の矛盾する性格、現代風に言えば自己同一性危機を惹起する幻惑を空海自身がよく意識していたことが、次の、

32 我見鏡中吾又在鏡 吾非我是何真⁽¹³¹⁾（我れ鏡中を見れば吾れ又鏡に在り 吾れ我れに非ず是れ何か真） —— 「鏡詩」に読み取れる。

カテゴリーJからMの、破邪・魔除け・辟邪・鎮魂・未来予知・招福という鏡の機能については、空海の著作には確認できない。本節の最後に、

★U 採火・取水の器…陽燧と方諸の事例を掲げる。

33 方諸招水則父子相親。⁽¹³²⁾（方諸水を招けば則ち父子相親しむ）。 —— 『秘蔵宝鑑』第一住心

方諸が月から水を招来する如く、父子は自ずと本能的に相い親しむ道理であると説く句で、方諸と月の感応

を父子の相親に喩える。

34 曦和麗天。圓鏡引而焰發。月殿雲表。方諸召而水流。⁽¹³³⁾ (曦和「太陽神」天に麗^つけれども、圓鏡引いて焰^{ほの}發す。

月殿雲の表^{ほか}なれども、方諸召いて水流る。——「爲管平章事願文」

炎を發火させる円鏡が陽燧を指すことは言を俟たない。陽燧と方諸の組み合わせは、『抱朴子』や『淮南子』⁽¹³⁴⁾の記述から直接採ったとも、『大日經疏』の「如方諸向月而水降。圓鏡向日而火生」⁽¹³⁵⁾を参照したとも、両方の可能性が考えられる。

四 空海のテクストにおける「鏡」の諸相…②仏の智慧

本節では、鏡を仏のさとり境界・仏の智慧のシンボルとして用いる事例を集中的に紹介する。既に指摘している通り、仏教教理では「鏡」は仏智の半ば術語化した定型表現ではあるものの、月並みな語彙と一括りせず、丁寧に拾い上げる。

まず明鏡止水に端的に言い表されるように、

★H 心の本来あるべき状態＝鏡

の文例を見る。

35 遠而不遠即我心。絶之不絶是吾性。水清則不到而到。鏡瑩則不得而得。⁽¹³⁶⁾ (遠くして遠からざるは即ち我が心

なり。絶へて絶へざるは是れ吾が性なり。水清むときは則ち到らずして到り、鏡瑩^{みか}くときは則ち得ずして得。)——「天長

皇帝爲故中務卿親王捨田及道場支具入橘寺願文」

ここには心と清水と明鏡が等号で結ばれ、澄明清浄なる状態に心を保つべき理想が述べられる。これは大乘

教理で言う自性清淨心に類する考え方であり、実際に空海は『法華經開題』で衆生本具の清淨なる心を円鏡に擬えている。

36 何故⁽¹³⁷⁾レ娑字門照於諸法。謂本性清淨故。本性清淨者衆生本來清淨之心。此清淨心。猶如圓鏡無垢能現諸色像。(何んが故にか^レ娑字門は諸法を照らすや。謂く本性清淨なるが故に。本性清淨とは衆生本來清淨の心なり。此の清淨心は猶し圓鏡の垢無くして能く諸の色像を現するが如し。)

かくの如く、一切衆生の心の本来あるべき状態を清淨円明の鏡と観想する修道体系の中で、衆生と仏が平等不二であるという如来藏思想を基底として、「仏智[〓]円鏡・明鏡の心」の概念が定立される。

★N 悟りの智慧・仏智としての鏡

の表現は、空海のテクストに頻発する。

37 大仙圓智略有五十三焉⁽¹³⁸⁾ (大仙「仏」の圓智に略して五十三有り) —— 「遊山慕仙詩」

38 見池中圓月。知普賢之鏡智。仰空裡慧日。覺遍智之在我。⁽¹³⁹⁾ (池中の圓月を見ては普賢の鏡智を知り、空裡的慧日を仰ぎては遍智の我在るを覺る。) —— 「沙門勝道歷山瑩玄珠碑并序」

39 早得無我大我。大我則毘盧舍那之別名。於自心鏡中觀真言大我。⁽¹⁴⁰⁾ (「行者」早く無我の大我を得。大我は則ち毘盧舍那の別名なり。自心の鏡中に於て真言の大我を觀ず。) —— 『梵網經開題』

三密瑜伽で入我我入を果たすことをここでは大我[〓]毘盧遮那を得ると記すが、それを自心の鏡に見出すというのは、則ち〈自心[〓]鏡[〓]曼荼羅[〓]仏智の顯現〉の平等無二を証得する即身成仏の成就を意味する。

先に「真言の大我」と表明される大日如來の德智開顯は、空海の諸テクストでは具体的に円鏡・明鏡・月鏡・智鏡という熟語を以て、明証的に配置される。

40 一乘甘露灌頂佛種。開慧眼見不生。敷心蓮鑒圓鏡。⁽¹⁴¹⁾ (一乗の甘露、頂に佛種を灌がむ。慧眼を開きて不生を見、

心蓮を敷て圓鏡に鑒みむ。——「爲弟子僧真境設亡考七七齋願文」

41 遮耶遺體懸圓鏡以遠照。是以大日如來坐法界而照機。住秘宮而投藥。⁽¹⁴²⁾（遮耶の遺體は圓鏡を懸けて以て遠く照す。是を以て大日如來は法界に坐して機を照し秘宮に住して藥を投ず。）——『大日經開題（大毗盧遮那）』

42 焉我大師薄伽梵大悲毗盧遮那三昧耶雲海普遍法界。毗鉢舍圓鏡常寂鑒照。觀察佛惠本具衆生心。悲嘆衆生不曾見心佛。⁽¹⁴³⁾（ここに我が大師薄伽梵大悲毗盧遮那は、三昧耶の雲海普く法界に遍じ、毗鉢舍の圓鏡常寂にして鑒照す。佛惠本より衆生の心に具せりと觀察し、衆生の曾て心佛を見ざることを悲嘆す。）——『大日經開題（三密法輪）』

43 衆生三密潔白分明故。此清淨三密猶如圓鏡無垢能現諸色像。⁽¹⁴⁴⁾（衆生の三密は潔白分明なるが故に。此の清淨の三密は猶し圓鏡の垢無くして能く諸の色像を現するが如し。）——『法華經釋』（文例 36 に類似）

これらに表明される衆生の自性清淨なる三密は、真言教理では本尊の三密と即同と説かれるが故に、円鏡なる衆生三密は結局大日如來の三密の形容と測定できるのである。

次に明鏡の文例は、

44 如智法王乘於大悲輦出自法界宮。打五藏法鼓令驚覺五智之在己。懸三密明鏡使徹視三點之非他。⁽¹⁴⁶⁾（如智の法王「大日如來」大悲の輦に乗つて法界宮より出でて五藏の法鼓を打ち、五智の己に在ることを驚覺せしめ、三密の明鏡を懸けて三點「法身・般若・解脫」の他に非ざることを徹視せしむ。）——『大日經開題（今釈此經）』

45 此是十喻詩。修行者之明鏡。求佛人之舟筏。⁽¹⁴⁷⁾（此れ是の十喻の詩は、修行者の明鏡、求佛の人の舟筏なり。）——「詠十喻詩」

等が挙げられる。44 の「三密明鏡」は大日如來の宣布する教え、則ち密教のシノニムとして用いられ、45 も真言行人の依拠すべき教法の意味合いで明鏡と表明されている。如來五智と鏡の關係については後にまとめて取り扱う。

46 月鏡盈盈。忽迢遙金剛之月殿。日輪赫赫。速放曠蓮臺之日宮。⁽¹⁴⁸⁾（月鏡盈盈「満ちること」として忽ちに金剛

の月殿に迢遙し、日輪赫赫として速やかに蓮臺の日宮に放曠せむ。）——「笠大夫奉爲先妣奉造大曼荼羅願文」

この文例では「月鏡・金剛の月殿」と「日輪・蓮臺の日宮」が、それぞれ金剛界・胎藏界の両部に配当されており、
澄明なる満月を通して仏境界に渉入する五相成身の金剛界觀法を月鏡が象徴する。

太陽と月をセットで取り扱う文例として、

47 遍明者圓寂之本「中略」日燈擎空唯除一天之。月鏡懸漢誰作三千之明。⁽¹⁴⁹⁾（遍明は圓寂の本なり。「中略」日燈
空に擎げて唯一天の暗を除き、月鏡漢に懸けて誰か三千の明を作さむ。）——「高野山萬燈會願文」

も挙げられる。日燈と月鏡は当然大日如來の徳智のはたらきを表現するものである。

智鏡の事例を列挙すれば、以下の通り。

48 智鏡處心。無緣則闕利物之力。⁽¹⁵⁰⁾（智鏡心に處すれども、緣無きときは則ち利物の力を闕く。）——「和氣夫人於法華
寺奉入千燈料願文」

49 字字法身引盈盈之月曜。句句本尊熾赫赫之日光。懸智鏡於心臺。嘗醍醐于寶殿。⁽¹⁵¹⁾（字字の法身、盈盈たる
月曜を引き、句句の本尊、赫赫たる日光を熾にせむ。智鏡を心臺に懸け、醍醐を寶殿に嘗めん。）——「葛木參軍設先考忌

齋願文」

文例46に類似して月と日輪、心蓮台と金剛寶殿が対比的に読み込まれている。対句の構造として、月が智鏡
に対応するから、容易に月鏡＝智鏡の同定が可能である。ただし、文例46とは異なり、ここでは月＝智鏡が胎
藏界の理法身に割り当てられる。

50 褰妄霧以靚大日。懷智鏡以照實相。⁽¹⁵²⁾（妄霧を褰げて以て大日を靚、智鏡を懷いて以て實相を照らさむ。）——「爲

田少式設先妣忌齋願文」

大日如來の智慧について、そのさとり境界で能照が智鏡、所照が諸法実相と表明される事例である。

51 至如大日遍照法界。智鏡高鑒靈臺。内外之障悉除。自他光普舉。⁽¹³⁾ (大日遍照法界を照らし、智鏡高く靈臺を

鑒るが如きに至っては、内外の障悉く除き、自他の光普ねく舉ぐ。)——「高野山萬燈會願文」(文例47の続き)

ここでは、大日如來と智鏡が全くの同レベルで取り扱われており、光り輝く智慧の円明なる鏡が大毘盧遮那の理智不二法身そのものとして捉えられている。それは当然ながら、密教的五智五仏の思想に基づく同定である。

★0 大円鏡智・五智の概念

まず五智と智鏡が述べられる文をまとめる。

52 三藏教海。波濤臂吻。五部觀鏡。照曜靈臺。⁽¹⁴⁾ (三藏の教海、臂吻に波濤し、五部の觀鏡、靈臺に照曜す。)——「恵

果和尚之碑文」

師の恵果阿闍梨の仏道修学の広汎甚深なることを述べる句で、仏蓮金寶羯五部の奥義に達することを「五部觀鏡照曜靈臺」と称揚している。

53 幽顯同福併鑒本有之五鏡。常沐佛護鎮遊法苑。⁽¹⁵⁾ (幽顯「幽明」福を同じくして併ながら「悉くの意」本有の五鏡

を鑒み、常に佛護に沐して鎮へに法苑「仏国土」に遊ばしむ。)——「東太王爲故中務親王造刻檀像願文」

嵯峨上皇が伊予親王の鎮魂のために開いた法要の願文で、衆生に本来具有される仏性を五鏡と表現する。それは則ち普賢大菩提心としての金剛界五智である。

54 乘蓮金體懸五鏡而獨尊。覺眼玉豪吞六大構相。⁽¹⁶⁾ (乗蓮の金體は五鏡「五智」を懸けて獨尊なり、覺眼の玉豪は六

大を吞んで相を構ふ。)——「濟恩寺願文」

五鏡に比定される五智の中で、特に円明なる仏智と強調されるのが「大圓鏡智」である。

55 恐是歎佛五智德耳。就中初句歎大圓鏡智。⁽¹⁵⁸⁾（恐らくは是れ佛の五智の徳を歎ずるのみ。中に就て初めの句は大圓鏡智を歎ず。）——『真実經文句』

大圓鏡智を含んで、仏の五智を列挙して定義するテクストは

56 謂五智者。一大圓鏡智。二平等性智。三妙觀察智。四成所作智。五法界體性智。則是五方佛也。如次東南西北中配知之。⁽¹⁵⁹⁾（謂く五智とは、一には大圓鏡智・二には平等性智・三には妙觀察智・四は成所作智・五には法界體性智なり。則ち是れ五方の佛なり。次の如く東南西北中に配して之を知れ。）——『十住心論』卷十及び『弁顯密二教論』、『瑜祇經』經文への割注

57 云何五智。謂一者大圓鏡智。二者平等性智。三者妙觀察智。四者成所作智。五者法界體性智。從此五智流出三十七智一百二十八智乃至十佛刹微塵數不可說不可說一切智智。⁽¹⁶⁰⁾（云何が五智。謂く一には大圓鏡智、二には平等性智、三には妙觀察智、四には成所作智、五には法界體性智なり、此の五智從り三十七智・一百二十八智乃至十佛刹微塵數不可說不可說の一切智智を流出す。）——『梵字悉曇字母并釋義』

等の文例を指摘できる。五智がいかに密教教理の枢要に位置するかは、五智が五仏に配当されて、ここから一切智智が流出すると説かれる根源性に見て取れる。『金剛頂經開題』には「密義五智佛名一切如來〔中略〕此五佛則諸佛之本體諸法之根源」と説かれて、五仏と一切如來との等同が強調されるが、五仏Ⅱ一切智智Ⅱ一切如來であるとはこれが大日如來の内実到他ならないことを示す。そして、その五仏の具体は、『秘藏宝鑰』所引の『菩提心論』三摩地段の文、

58 於三十七尊中。五方佛位各表一智也。東方阿閼佛由成大圓鏡智亦名金剛智也。南方寶生佛由成平等性智。亦名灌頂智也。西方阿彌陀佛由成妙觀察智。亦名蓮花智亦名轉法智。北方不空成就佛由成成所作智。亦名羯磨智也。中方毗盧遮那佛由成法界智為本。⁽¹⁶²⁾（書き下し省略）——『秘藏宝鑰』第十住心

によつて、阿闍・宝生・阿弥陀・不空成就・毘盧遮那が東南西北中に配置されて五智を體現する真言教理として定立されるのである。

金剛界曼荼羅の基本構造「五解脱輪」⁽¹⁶³⁾は、大日如來の徳智が五智五仏の形態を以て投影されるフラクタル図形⁽¹⁶⁴⁾であるが、これが五枚の円鏡を並べた構図そのものであることは直覺的に認知され得る。この五智五仏を根源とする金剛界にあつて、金剛部の仏智(＝金剛智)が大圓鏡智の名を持つことは感覺的に明証性を備えると判断できる。円鏡・明鏡・月鏡・智鏡と様々に換言できる仏の智慧のシンボルは、教理的には大日如來の金剛智⁽¹⁶⁵⁾＝大円鏡智に統合され、それは凡聖不二の原則から衆生本具の菩提心に潜在する五鉷金剛杵形の五智＝仏性・如來藏と理解される。真言行者は普賢大菩提心を開發する金剛薩埵に同体化しながら、大日如來のさとりへと上求菩提の道程を進むが、その最初の一步が金剛部の金剛智・大円鏡智の加被を蒙つての勇進であることは、大變象徴的である。

大円鏡智という表現を空海テキストに探索すれば、次のような事例に出会う。

- 59 大菩提心普賢滿月(大圓鏡智也)——『十住心論』卷十及び『弁顯密二教論』…『瑜祇經』經文と割注⁽¹⁶⁶⁾
- 60 適以印密言印心成大圓鏡智速獲菩提心金剛堅固體。⁽¹⁶⁷⁾(適に印・密言を以て心を印すれば大圓鏡智を成じて、速かに菩提心金剛堅固の體を獲。)⁽¹⁶⁸⁾——『即身成仏義』
- 61 阿闍則觀音圓鏡自性金剛智。(阿闍は則ち觀音の圓鏡自性の金剛智なり。)⁽¹⁶⁹⁾——『法華經開題』(疏河女人)『
- 62 顯示果円滿者。大円鏡智分明現前乃至平等虚空一相無相。⁽¹⁷⁰⁾(果円滿者を顯示す。大円鏡智分明に現前して乃至平等虚空にして一相無相なり。)⁽¹⁷¹⁾——『釈論指事』
- 63 第二阿闍鞞 智依圓鏡所 初方作部尊 遂号金剛部。⁽¹⁷²⁾(第二に阿闍鞞、智は圓鏡の所に依り、初方に部尊と作つて遂に金剛部と号す。)⁽¹⁷³⁾——『宗秘論』

64 微細住自然者。金剛自性大圓境智阿闍佛是。⁽¹⁷²⁾（微細住自然とは金剛自性大圓境智阿闍佛是れなり。）——『金剛

頂經開題』

菩提心・満月・金剛堅固・果円満・明月・金剛部といった仏の功德に大円鏡智が結びつけられ、果分の円満仏智を示す鍵概念として大円鏡智が空海に用いられることが確認される。⁽¹⁷³⁾

五 空海のテキストにおける「鏡」の諸相…③成仏への回路「円鏡力故実覚智」

本稿の最後に、五仏五智の大円鏡智の概念を受けて、鏡が即身成仏の実践に大きく関与する事例を検討する。

★P 行者に授与する灌頂具としての鏡

この文例は、唯一『宗秘論』の、

65 灌頂⁽¹⁷⁴⁾有多般 五種最殊要。寶冠潔繪綵 光明与名号 金瓶盛海水。授鏡為表心。心静見如来 似鏡

貪明妙。⁽¹⁷⁵⁾（灌頂に多般有り、五種最も殊要なり。寶冠と潔繪綵と光明と名号と、金瓶に海水を盛るとなり。鏡を授くるは為心を表す。心静まれば如来を見たてまつること、鏡に明妙を貪るに似たり。）

を指摘することができる。また観法を鏡にリンクさせる事例は、

66 鏡喻觀法文⁽¹⁷⁶⁾ ——『大毘盧遮那成仏経疏文次第』〔第十九卷〕

に確かめられ得る。事相の次第や観法の具体に触れる事は空海の著作では極めて稀であるから、事例の少なさは意外ではない。前節で論じた智鏡・大円鏡のイメージは、仏境界への速やかな到達を確言する空海密教では、必要不可欠の跳躍台の役割を果たす。ここでは

★Q 悟りの場・悟りへの回路

と範疇化できる、即身成仏と鏡の関係性を見る。

「爲亡弟子智泉達囑文」には早逝した股肱の弟子智泉に対し、法施として智泉が体得した密教の精髓を語りかける誠に感動的な一節が存する。そこでも、鏡は大日如来と密接な関係を具す、特別な法力の象徴として智火と共に言及される。

67 法界三昧汝久修習。遮那四秘汝亦游泳。觀月鏡於心蓮。燒妄薪於智火。我則金剛我則法界。三等真言

加持故。五相成身妙觀智力。即身成佛即心曼荼(176)。(法界の三昧は汝「智泉」久しく修習「修行持念」す。遮那の

四秘「四智印」は汝亦た游泳す。月鏡「本有大日如来の理法身」阿字「滿月輪」を心蓮(177)に觀じ、妄薪(178)「煩惱」を智火に焼く。

我則ち金剛「金薩」、我則ち法界。三等の真言加持の故に、五相成身 妙觀智力「妙觀察智の力」をもて、即身成佛し即心の曼荼なり。)——「爲亡弟子智泉達囑文」

全体が厳格な対句に基づく四六駢儷体で綴られるこの名文は、ここでは語彙表現を金胎両部に振り分けながら整然と重要な教理概念を開展する。則ち、

胎藏界…法界三昧、心蓮、三等真言

金剛界…遮那四秘、智火、五相成身

と対応させつつ、我則金剛薩埵という真言行人の心構えが大日法界に渉入する鍵である旨を伝え、その手段が三平等真言(入仏三昧耶真言「曩莫三曼多沒駄南阿三迷底里三迷三摩曳婆縛訶」と五相成身觀であること、従つて空海の下で智泉が修習し游泳した仏境界とは「即身成佛」であり、自心本有の淨菩提心に毗盧遮那大悲の徳智を如実に開顯する、即心の曼荼羅を完成させることだと述べる。如来加持と智火智力を蒙つて金剛堅固の菩提心が法界に即入するプロセスの第一歩が、澄淨円明なる「月鏡」を觀察すること、すなわち金剛部の金剛智「大円鏡智が普賢行を發起する發菩提の行動に存すると確認できる。月鏡・智鏡は、つまり入仏三昧耶や五相成身の

真言を正常に機能させるために不可欠な、悟りへの秘鍵なのである。

『即身成佛義』では、鏡が真実を照射する聖なる力として六大無礙なる即身世界の実相を開く源泉の役割を果たす。「重重帝網名即身」の句に対する喩釈で、

68 如是等身縱横重重如鏡中影像燈光涉入。彼身即是此身。此身即是彼身。佛身即是衆生身。衆生身即是佛身。不同而同。不異而異。⁽¹⁷⁾（是の如く等の身は、縱横重重なること、鏡中の影像と燈の光の渉入するが如し。彼身即ち是れ此の身、此の身即ち是れ彼の身、佛身即ち是れ衆生の身、衆生の身即ち是れ佛身なり。不同にして同なり、不異にして異なり。）——『即身成仏義』

と記される。表層の奥深くに隠された真実相を鏡面が映し出すという靈鏡の機能（カテゴリーH）に加え、二つの鏡と燈火を導入することで、合わせ鏡の中で無限連鎖的に増殖する輝き（燈光・宝珠）のイメージを喚起し、一つの燈火が宇宙全体のあらゆる輝きと相即渉入し、無礙円融法界を成就する所の一即多多即一概念を直覺的に表現する。華嚴経理に由来する（「千光萬色雖重重交映。而歷歷區分。亦如兩鏡互照。重重渉入。傳曜相寫」⁽¹⁸⁾）この合わせ鏡と無限燈光の比喩を、空海はまさに即身という状態を説明するのに適した比喩として採用する。仏身と衆生の身が不二一如である一切法平等の理趣は、鏡と光（67では月鏡と智火）を以て開示されるわけである。

かくの如く真実の扉を開く聖なる力を鏡は持つ。その玄妙なる智力は、即身成仏頌の末句「圓鏡力故實覺智」に端的に表明される。

69 圓鏡力故實覺智者此即出所由。一切諸佛因何得覺智名。謂如一切色像悉現高臺明鏡之中如來心鏡亦復如是。圓明心鏡高懸法界頂寂照一切不倒不謬。如是圓鏡何佛不有。故曰圓鏡力故實覺智。⁽¹⁹⁾（圓鏡力の故に實覺智なりとは、此れ即ち所由を出だす。一切の諸佛、何に因つてか覺智の名を得るや。謂く、一切の色像、悉く高臺の明鏡の中に現するが如く、如來の心鏡もまた是の如し。圓明の心鏡、高く法界の頂に懸けて一切を寂照するに、不倒不謬

なり。是くの如くの圓鏡、何れの佛にか有さざらむ。故に「圓鏡力故實覺智」と曰ふ。——『即身成仏義』

「圓鏡力」と「實覺智」の關係は、詩句の構造的には、円鏡の智慧と実覺の法力を兼ね備えた仏の徳智が、成仏の實際的な基底を為しているという不二体の状態を示す。「高臺の明鏡」「圓明の心鏡」が並置されて、これが全ての仏が必ず具している「如来の心鏡」と定義されるから、「圓鏡」とは仏不共の徳智、端的に仏智と同定できる。前節で取り扱ったように、密教的には仏智は五智に他ならないから、如来の心鏡は即ち大日如来の五智五仏を指す。円鏡の語が東方阿閼仏の大円鏡智を想起させるが、ここでは五智五仏の統覚智である法界体性智・大日如来の智徳そのものを、総括的に円鏡力と表現する。

「實覺智」は物事があるがままにさとりる智慧、如実智と語釈できるが、その内実は、即身成仏頌で列举されてきた一切智智(薩般若・無塵数の仏菩薩・五智(五仏即一切如来・無際智を摂し尽くした大日の智慧の総称である。法身大日の五智無際智という智徳は、翻って一切衆生に本有の相同なる実覺智として潜在し、この自心の内なる仏智に目覚めて、自身のあるがままの相を観察覺知する如実知自心の実践者こそが、即身成仏を完遂するのだと導き出せる。

結論的に言えば、衆生本具の淨菩提心に目覚め、六大無礙重重帝網なる凡聖不二の理趣を、三密瑜伽の妙行で窮め尽くせば、自心の曼荼羅を開顯して仏果を得るというのが空海の即身成仏論である。その時に本有の仏性を照らし出すのが「高臺の明鏡」「圓明の心鏡」である大日如来の五智円鏡に他ならず、所照の秘藏された如来蔵もまた

70 事均篋鏡 理同礦珠「中略」本覺⁽¹⁸²⁾——『卍字義』

と鏡に擬えられるのであつてみれば、空海の成仏思想をめぐる言説に、真実の姿を照らし出す靈威の「鏡」が決定的な重要性を果たしている実態を、明瞭に理解できると言い得よう。

六 まとめ

本稿では、「鏡」の具有する宗教象徴性を概観し、幾つかのパターンにカテゴリー化した上で、空海のテキストで用いられる鏡に関する表現を網羅的に検討した。

隠された真実を暴く真理開顕の「秦鏡」という空海愛用の故事を紹介し(第二節)、空海のテキストに見出される様々な鏡の用法を整理(第三節)した。そして、悟りの智慧・仏智としての鏡表現「円鏡・明鏡・月鏡・智鏡・大円鏡智」が大日如来自内証の境界を象徴する役割を果たしていること(第四節)、特に即身成仏思想を表明する言説において鏡がさとりへの回路を開く決定的な重要性を付与される事態(第五節)を確認したのである。なお、空海の著作には『大乘起信論』所説の四鏡⁽⁸³⁾、及び『釈摩訶衍論』所説の鏡の比喻⁽⁸⁴⁾が引かれるが、本稿では考察の対象外としたことを付言しておく。

以上

註

(1) 鏡に関する考古学的・文化史的な諸研究から、本稿では次のような論考を参照して考察を進める。

*ポール・ドミエヴィル／柴田増實訳「靈鏡」『禅学研究』通号五〇、一九六〇年、一五八〜一七七頁

*福永光司「道教における鏡と劔―その思想の源流―」『道教思想史研究』岩波書店、一九八七年、一〜六九頁(初出『東方學報』第四五冊、一九七三年)

*森浩一編『日本古代文化の探究・鏡』社会思想社、一九七八年

*小南一郎「鏡をめぐる伝承―中国の場合―」『日本古代文化の探究・鏡』二〇七〜二四六頁

- * 齊藤孝『古代の社寺信仰と鏡』『日本古代文化の探究・鏡』二六九～三二八頁
- * 和田萃『古代日本における鏡と神仙思想』『日本古代文化の探究・鏡』一六七～二〇六頁
- * 青木豊『和鏡の文化史―水鑑から魔鏡まで―』刀水書房、一九九二年
- * ユルギス・バルトルシャイティス『鏡―科学的伝説についての試論、啓示・SF・まやかし―』谷川渥訳、国書刊行会、一九九四年(原著一九七八年)
- * 中村潤子『鏡の力 鏡の想い』大巧社、一九九九年
- * 大西龍峯『鏡と智慧』『駒澤短期大学佛教論集』第七號、二〇〇一年、九三～一三三頁
- * リチャード・グレゴリー『鏡という謎―その神話・芸術・科学―』鳥居／鹿取／望月子／鈴木 訳、新曜社、二〇〇一年(原著一九九七年)
- * 岡村秀典『鏡が語る古代史』岩波新書、二〇一七年
- * 新井悟編『古鏡のひみつ―「鏡の裏の世界」をさぐる―』河出書房新社、二〇一八年
- (2) グレゴリー一九五～二二一頁
- (3) 同六一～六二頁
- (4) 青木三～四頁
- (5) 岡村一～八頁
- (6) 『広雅』釈詁に「鑒〔鑑〕謂之鏡」と記される。福永五二頁注8
- (7) 岡村九頁、小南二二～二三頁
- (8) 小南二六～二七頁
- (9) 岡村九～一〇頁
- (10) 福永一八頁
- (11) 同三〇頁
- (12) 岡村一三～一八頁

- (13) 西洋文化的文脈では、太陽自体が鏡として理解される。cf. バルトルシャイティス一〇四〜一〇六頁
- (14) 岡村三三四頁、和田一九八頁
- (15) 青木一〇一頁
- (16) 和田一九八〜一九九頁、グレゴリー六二頁
- (17) 「天照大神、手に寶鏡を持ちたまひて、天忍穗耳尊に授けて、祝きて曰はく〈吾が児、此の鏡を視まさむこと、當に吾を視るがごとくすべし〉」『日本書紀』神代紀第九段一書第二、岩波日本古典文學大系本(上) 岩波書店、一九六七年、一五二頁
- (18) 岡村六六〜七二頁
- (19) 福永一九頁。Cf. 「亦可云…握天鏡、金鏡、玉鏡、神珠」『文鏡秘府論』卷北「帝德録」の一節、定本卷六、二二七頁
- (20) 福永三四頁
- (21) 「天照大神、乃ち天津彦彦火瓊瓊杵尊、八坂瓊の勾玉及び八咫鏡・草薙劔、三種の寶物を賜ふ」『日本書紀』神代紀第九段一書第一、一四六頁
- (22) 新井三三頁
- (23) 福永一八頁
- (24) 小南二二〇頁、岡村一一頁
- (25) 新井二〇〜二二頁
- (26) 『莊子』内篇、ちくま学芸文庫、二〇一三年、一九頁注36
- (27) 『莊子』内篇・応帝王篇第七、二七六頁
- (28) 『莊子』外篇・天道篇第十三、一七七頁
- (29) 『莊子』内篇・徳充符篇第五、一六二頁
- (30) 同一六九頁
- (31) 福永一八頁

- (32) 同一九頁
- (33) 同一九頁
- (34) 同一八頁
- (35) 「清静を本質とする明鏡は万物の本性をくまなくあらわすとする『淮南子』の思想をふまえる」福永二八頁
- (36) 「明鏡が妖魅の正体を照破するという思想」福永二八頁
- (37) 小南二三〇～二三二頁
- (38) 同二三三～二三五頁
- (39) 岡村一八～一九頁
- (40) 「古之入山道士、皆以明鏡徑九寸已上懸於背後、則老魅不敢近人。或有來試人者。則當顧視鏡中。其是仙人及山中好神者、顧鏡中故如人形。若是鳥獸邪魅、則其形貌皆見鏡中矣。又老魅若來、其去必卻行、行可轉鏡對之、其後而視之、若是老魅者、必無踵也。其有踵者、則山神也」『抱朴子』登涉篇。福永二六頁に書き下しが記載される
- (41) 大正四六・二六六上
- (42) 大西九九頁。日本の修験道の入山にも鏡は必須の器具とされた、cf. 和田一九五頁
- (43) 岡村二三～二六頁
- (44) 齊藤二八六頁
- (45) これは鏡・劍が埋葬された死者の傍らに置かれて、死者の仙界への再生を願う信仰に結びつくとする思想にも適用される。福永二六頁、四五頁
- (46) 小南二三六～二三七頁及びグレゴリー八二～八五頁
- (47) 『抱朴子』雜應篇には、四規と称される明鏡・日月鏡を用いて見神し「年命延長」を得ると記される。福永二七～二八頁
- (48) 岡村二三頁。鏡裏の銘文に「官位尊顕在蒙祿食」(岡村六九頁)や「壽如金石之國寶兮」(同七四頁)と刻まれる例を典型とする
- (49) 岡村三八～四八頁

- (50) 新井五〇〇五頁
- (51) 同四八〇四九頁
- (52) 同三七〇五〇頁（岸本泰緒子 文責）
- (53) 福永一九頁
- (54) 大正一・七六六上
- (55) 大正一六・八一四下
- (56) 大正九・五〇上
- (57) 大正一〇・八二五下
- (58) 大正三三・五八一下
- (59) 大正三三・五七六下
- (60) 大正一八・九四五下
- (61) 大正一六・七二一中
- (62) 大正一八・一二上
- (63) 大正三九・七二四中
- (64) 大正一八・二五二上
- (65) 大正一八・一八下
- (66) 大正一八・九四中
- (67) 大正一八・一〇七下
- (68) 齊藤二八九〇二九二頁、中村一二五〇一二六頁
- (69) 例えば西大寺十一面堂では九十面の鏡が懸けられた、齊藤三〇〇頁
- (70) 齊藤二九八〇三〇二頁、中村一二七〇一三一頁
- (71) 齊藤三一〇三一二頁、中村二三八〇一三九頁

- (72) 齊藤二七六〜二七八頁
- (73) 同二七八〜二八四頁
- (74) 根本の天照大神の「御魂」が鏡とされる。荒川紘『龍の起源』紀伊國屋書店、一九九六年、一七四頁
- (75) 「鏡は救世主の象徴である。鏡は聖書の象徴である。鏡は永遠の御言（みことば）の象徴である。鏡は預言的ヴィジョンの象徴である。鏡はキリストの生命の象徴である。鏡は神を見出す理性の象徴である。鏡は明白な創造の象徴である」
バルトルシャイティス一二二頁
- (76) 同二四〜二五頁
- (77) 小南二四二頁、中村一四四〜一四六頁
- (78) 中村一四七頁
- (79) 同二四七頁
- (80) 小南二四三頁
- (81) 『弁顯密二教論』定本卷三、七六頁
- (82) 大正七七・四二九上
- (83) 作者は漢の劉歆撰・晋の葛洪編などの説もあるが、後代の偽託とするのが通説である。福井重雄編『訳注西京雜記・独断』東方書店、二〇〇〇年、六頁、及び小南一郎『西京雜記』の伝承者たち』第二章、岩波書店、一九八四年、九五〜一四三頁参照
- (84) 『訳注西京雜記・独断』九〇〜九二頁
- (85) 同九二〜九三頁および岡村一九頁の釈を参考にした
- (86) 中村一〇三頁
- (87) グレゴリー六六頁
- (88) 大西九五頁
- (89) 『秘蔵宝鑑』定本卷三、一四〇頁

- (90) 『三教指帰』 定本巻七、七一頁
- (91) 葉公は葉公子高、戦国時代末期の人で、楚の王室の一族。姓は沈しん。名は諸梁、字は子高。葉しやうの土地を領地としたため葉公と称す。『莊子』内篇、ちくま学芸文庫、一三六頁注1
- (92) 弘全は「珍」と作る
- (93) 「遊山慕仙詩」『性靈集』巻一、定本巻八、八頁
- (94) 前漢の劉向著『新序』「葉公子高好龍、鉤以寫龍、鑿以寫龍、屋室雕文以寫龍。於是天龍聞而下之、窺頭於牖、施尾於堂。葉公見之、棄而還走、失其魂魄、五色無主。是葉公非好龍也、好夫似龍而非龍者也」と記される
- (95) 「詠鏡中像喻」『性靈集』巻十、定本巻八、二〇八頁
- (96) 室羅城中の演若達多やジュナダッタ Yajñadatta 長者。『首楞嚴經』に説かれる。鏡の中に自分の頭が映っていなかったの、自らを魍魎だと思い誤り狂ったとされる。大正一九・二二中。運敝『便蒙』三五七頁で指摘される
- (97) 『文華秀麗集』『群書類従第八輯』文筆部巻一二四、四八七～四八八頁
- (98) ただしここでは月に擬えるので方鏡ではなく円鏡の形で用いられる
- (99) 『三教指帰』 定本巻七、四七頁
- (100) 『性靈集』巻一、定本巻八、一一頁
- (101) 同巻二、定本巻八、二三～二四頁
- (102) 同巻二、定本巻八、二四頁
- (103) 同巻二、定本巻八、三一頁
- (104) 同巻十、定本巻八、一八六頁
- (105) 『宝鑰』 定本巻三、一六一頁
- (106) 『性靈集』巻二、定本巻八、二二頁
- (107) 同巻四、定本巻八、七二頁
- (108) 『劉子新論』因頤第二十に「鏡は瑩拂を以て鑑と成る」とある。小南二二～二三頁

- (109) 『性霊集』 卷十、定本卷八、二〇四頁
- (110) 『宝鑰』 定本卷三、一四三頁
- (111) 『性霊集』 卷六、定本卷八、一〇一頁
- (112) 『弁頭密二教論』 定本卷三、一〇八頁。『大智度論』 卷九、大正二五・二六中の引用
- (113) 『性霊集』 卷八、定本卷八、一三一頁
- (114) 鵲^{かき}は男女の仲を取り持つ(牽牛と織女のために天の川に橋を架ける)瑞鳥と考えられ、紋様として鵲が鏡に鑄出された。小南二二三〜二二四頁、及び幸田露伴『金鵲鏡』(『幽情記』)『露伴隨筆』第三冊、岩波書店、一九八三年、二八〇〜二八一頁
- (115) 『性霊集』 卷八、定本卷八、一四五頁／『法華経開題(焼河女人)』 定本卷四、一八三頁と同文
- (116) 『宝鑰』 定本卷三、一二〇頁
- (117) 『性霊集』 卷四、定本卷八、六三頁
- (118) 『秘密曼荼羅教付法伝』 定本卷一、八二頁。圓照撰『貞元新定釋教目録』(大正五五・八七八上)からの抄録
- (119) 『文鏡秘府論』 卷北、定本卷六、二三〇頁「帝徳録」
- (120) 定本卷三、七六頁
- (121) 『三昧耶戒序』 定本卷五、六頁
- (122) 『三教指帰』 定本卷七、四六〜四七頁
- (123) 『文鏡秘府論』 卷天総序、定本卷六、四頁
- (124) 底本では草書体で記される
- (125) 『文筆眼心抄』 序、定本卷六、二五一頁
- (126) 西洋文化においても、鏡の映像が左右逆になることから「鏡は虚偽[錯誤]のまことの象徴である」と認識されることもある。バルトルシャイティス三八一頁
- (127) 『性霊集』 卷十、定本卷八、一九四頁

- (128) 同卷十、定本卷八、二一〇頁
- (129) 『摩訶般若波羅蜜經』大正八・二一七上
- (130) 『大般若波羅蜜多經』大正六・八〇四中
- (131) 『拾遺雜集』定本卷八、二二四頁
- (132) 『寶鑰』定本卷三、一一七頁
- (133) 『性靈集』卷七、定本卷八、一二二頁
- (134) 『淮南子』天文訓「陽燧見日、則燃而為火。方諸見月、則津而為水」
- (135) 大正三九・七八三上
- (136) 『性靈集』卷六、定本卷八、九四頁
- (137) 『法華經開題（開示茲大乘經）』定本卷四、一六二頁、『法華經開題（重圓性海）』定本卷四、一七六頁
- (138) 『性靈集』卷一、定本卷八、八頁
- (139) 同卷二、定本卷八、二五頁
- (140) 『梵網經開題』定本卷四、二二六頁
- (141) 『性靈集』卷八、定本卷八、一三六頁
- (142) 『大日經開題（大毗盧遮那）』定本卷四、三一頁
- (143) 『大日經開題（三密法輪）』定本卷四、五二～五三頁
- (144) 『法華經釋』定本卷四、二〇二～二〇三頁、『法華經開題（梵河女人）』定本卷四、一八七頁と同文
- (145) 『法佛三密甚深微細等覺十地不能見聞。故曰密。一一尊等具利塵三密互相加入彼此攝持。衆生三密亦復如是。故名三密加持』
『即身成仏義』定本卷三、二五頁
- (146) 『大日經開題（今釈此經）』定本卷四、二四頁
- (147) 『性靈集』卷十、定本卷八、二二一頁
- (148) 同卷七、定本卷八、一一三頁

- (149) 同卷八、定本卷八、一五八頁
- (150) 同卷七、定本卷八、一一五頁
- (151) 同卷七、定本卷八、一二二頁
- (152) 同卷七、定本卷八、一二四頁
- (153) 同卷八、定本卷八、一五八頁
- (154) 同卷二、定本卷八、三二頁
- (155) 同卷六、定本卷八、一〇二頁
- (156) 『拾遺性靈集』定本卷七、一九七頁
- (157) 本覺の常住法身の白毫の光をいう。『著作全集』卷三、五六七頁注8
- (158) 『真実經文句』定本卷四、一二二頁
- (159) 『十住心論』卷十、定本卷二、三一六～三二七頁。『弁頭密二教論』定本卷三、一〇四頁
- (160) 『梵字悉曇字母并釋義』定本卷五、一〇四～一〇五頁
- (161) 『金剛頂經開題』定本卷四、七七～七八頁
- (162) 『宝鑰』定本卷三、一六九～一七〇頁。『菩提心論』大正三二・五七三下～五七四上上の引用
- (163) 『分別聖位經』大正一八・二八八上
- (164) 頼富本宏『密教とマンダラ』日本放送出版協会、一九九〇年、一六八頁
- (165) 『理趣經』第十二段では「所謂一切有情如來藏。以普賢菩薩一切我故」と金剛部の藏性が如來藏性であると説かれる。大正八・七八五下。cf. 大塚伸夫『中期密教經典と菩提心』『大日經』『金剛頂經』『理趣經』春秋社、二〇二三年、四八八～四九二頁
- (166) 『十住心論』定本卷二、三二七頁。『弁頭密二教論』定本卷三、一〇四頁。『瑜祇經』大正二八・二五四上の引用と空海の割注
- (167) 『即身成仏義』定本卷三、二五頁。『金剛頂一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌』大正一九・三三二下下の引用
- (168) 庵歩欠(あふけ)の三字真言、則ち金輪仏頂尊の一字真言を

(169) 『法華經開題（號河女人）』定本卷四、一九二頁

(170) 『釋論指事』定本卷四、二九七頁

(171) 『五部陀羅尼問答偈讀宗秘論』定本卷五、四七頁

(172) 『金剛頂經開題』定本卷四、七九頁

(173) 空海假託『秘藏記』にも大圓鏡智についての記述が多く見出される。参考までに主なものを掲げる。

* 「五智」二大圓鏡智。謂自他三密無有邊際。名之大也。具足不缺曰圓。實智高懸万像影現鏡之喻也。 定本卷五、一二四頁、一五二頁

* 水性澄寂一切色相顯現喻大圓鏡智。 定本卷五、一二六頁

* 住大圓鏡智引入諸佛於己體如何。本尊三密鏡能照一切色相。如大圓鏡智能萬像影現。本尊與吾無二無別故。吾三密鏡能照同本尊。非唯本尊與吾無二無別。一切已成未成諸佛亦與吾無二無別故。諸佛三密鏡能照與我同 定本卷五、一二六

頁、一二七頁

* 本尊三密鏡明如大圓鏡智照一切色相。本尊與吾無二無別。吾三密鏡明如本尊三密鏡。已成未成諸佛與吾無二無別。已成未成諸佛三密鏡明如吾三密鏡。 定本卷五、一三〇頁

* 慈無量觀即第八阿賴耶識。是如來藏法界智。又大圓鏡智也。 定本卷五、一三一頁

* 妙色身如來者四智中尤近理。大圓鏡智用。万德圓滿妙色具足也。 定本卷五、一四三頁

(174) 『五部陀羅尼問答偈讀宗秘論』定本卷五、七一頁

(175) 『大毘盧遮那成仏經疏文次第』定本卷四、三三四頁

(176) 『性靈集』卷八、定本卷八、一四〇頁

(177) 心蓮は衆生本有の淨菩提心を指す。参照「真言大我本住心蓮。塵沙心數自居覺月。三等法門住佛日而常轉。秘密加持應機水而不斷。法性身塔。奇哉皇哉。」「奉為四恩造二部大曼荼羅願文」『性靈集』卷七、定本卷八、一〇八頁

(178) 参照「如來智火亦復如是。燒一切戲論煩惱薪盡」『大日經疏』大正三九・五八六上

(179) 『即身成仏義』定本卷三、二八頁

- (180) 澄觀述『大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔』大正三六・一〇下
- (181) 『即身成仏義』定本卷三、三一頁
- (182) 『卍字義』定本卷三、六二頁
- (183) 「言四種鏡者。一如實空鏡。二因熏習鏡。三法出離鏡。四緣熏習鏡。」『十住心論』卷九、定本卷二、二九九頁
- (184) 『十住心論』卷九、定本卷二、二九九〜三〇〇頁および『宝鑰』定本卷三、一六六〜一六七頁